

資料

## 体育大学における退学者の特徴に関する予備的研究

菊地 直子, 丸山 富雄

A preparatory study on the characteristics of dropouts from physical education college

Naoko Kikuchi and Tomio Maruyama

### 1. はじめに

近年の大学生の実態をみると、大学教育や大学生活に対する動機付けの低さが目立つ。現代社会においてとかく「学歴」を重視する風潮があることから、高校生たち、あるいは彼らを取り巻く環境はステータス獲得のために大学進学を促す。そのため、本人が大学教育を積極的に受けたい、と願わない場合においても入学が果たされる場合がある。また、社会に出ることに対して未だ消極的であるがために、大学進学を「猶予期間」として目的を持たないまま入学する場合もある。そのようにして入学してきた者は、大学という教育機関に不適応を起こす可能性があると考えられ、中途退学はそうした背景の中、生じることは容易に想像がつく。

一般に体育大学は、身体や運動、スポーツを中心とした教育を行うために、他の大学とは違った、明瞭で具体的な目標を持った学生が入学することが予想される。S 体育大学において毎年入学直後の学生に向けて行っている調査によれば、「志望校決定の際に最重要視する事柄」の回答として、「学部・学科」に次いで、「クラブ活動」「資格取得状況」が毎年圧倒的多数を占める。つまり、ほとんどの学生が、大学に対して強い動機付けを持って入学してくることが伺えるのである。しかし、それに反して毎年退学

していく者はかなりの数が存在する。そこには一般的な大学不適応ばかりではない、クラブや実技の授業など、体育大学特有の要因によって退学に至ることも予想される。

本研究は、上述したような明白な目的を持って入学してきたはずの体育大学生の退学者の特徴について、入試状況から見た全体的な傾向を明らかにするとともに、少ない事例ではあるが、入学時から退学に至るまでの変容について考察する。

### II. 方 法

#### 1. 過去 5 年間における退学者の属性分析

対象：S 体育大学の平成 3 年度から平成 7 年度までの過去 5 年間の退学者 154 名

分析内容：入試種別、在学年数、留年者率など

#### 2. 退学者への追跡調査

①対 象 S 体育大学における平成 4 年度から平成 8 年度 5 月までの退学者 137 名

②方 法 調査票による郵送法

③時 期 平成 8 年 7 月

④有効回収数 (率) 25 (18.2%)

## ⑤調査内容

## 退学者の属性

- ・入学時の特徴(大学選択状況など)
- ・在学中の特徴(クラブ, 授業, 生活, スポーツ観, 友人関係)
- ・退学時の特徴(きっかけ, 状況, 心境)
- ・自由記述

## III. 結 果

## 1. 退学者の全体的傾向

過去5年間の退学者の集計から、次のことが指摘できる。

- ・S体育大学の平成3年度から平成7年度までの過去5年間の在学生の入試別比率は、入学時の割合から推定すると推薦入試と一般入試の学生はほとんど同数と考えられる。その中で退学者の74.7%, 115名が推薦入試の学生であった(表1)。
- ・過去5年間の退学者の約6割は前期過程、または後期過程の留年者であった。そのことと関連して退学者の在籍年数別では2年間、及び5年以上が多い(表2)。
- ・過去5年間の留年者は220名おり、その中

表1 年度別退学者数内訳

	H3	H4	H5	H6	H7	計
一般入試	8	11	7	8	5	39
推薦入試	24	20	25	27	19	115
計	32	31	32	35	24	154

表2 在籍年数別退学者数

	1年間	2年間	3年間	4年間	5年以上	計
一般入試	8	9	6	3	7	39
推薦入試	21	32	20	17	25	115
計	29	41	26	20	38	154

表3 年年別留年者内訳

	H3	H4	H5	H6	H7	計
総数	53	42	76	25	24	220
退学率	79.2%	64.3%	44.7%	52.0%	20.8%	55.0%
推薦率	66.0%	61.9%	71.1%	72.0%	66.7%	67.7%

でもやはり推薦入学生の占める割合が67.7%と高い(表3)。

- ・休学者についても各年度平均10名程度はあるが、推薦入学生の割合が高い。

一般に、推薦入試の学生の方が一般入試の学生よりも学習意欲が高いと言われている<sup>6)</sup>が、S体育大学の場合には、退学者の割合から見れば必ずしもそのことは該当しない。すなわち、退学した推薦入学生の就学状況が、あまり芳しくないことが伺える。また、大学側の問題としては、推薦入学者はほとんどがクラブに入部することから、クラブ指導や、クラブでの修学指導に問題がある可能性も示唆される。

## 2. 追跡調査結果

今回の調査では、回収数25、回収率18.2%と極端に低い数値となってしまった。この数値からは、体育大学の退学者の特徴を一般化することはできない。本研究では、今後の研究のための予備的な研究として、この25名の退学者の入学時、在学中、退学時の特徴について分析し、体育大学特有の退学者像を析出することを目的とした。

## 1) 退学者の入学状況による分類

まず、入学時の彼らの状況を把握し、彼らがどういう形で入学したのかを検討するために、奥田・中込<sup>1)</sup>の職業決定過程の分類の基準を手がかりにしてタイプ分けを行った。この基準は、下山<sup>3)4)5)</sup>らの進路決定に関する見解を参考にして具体化されたものである。また、この分類基準は職業決定過程ばかりでなく、同様の意志決定にも援用できることが知られている<sup>9)</sup>。そこで本研究では、その中の①最終的な進路決定に対する決定や準備の程度、②大学入学時に

おける将来の展望の有無、という項目を採用し、それを入学時においての①大学入学・選択時の悩みの程度、②将来の展望の有無、と置き換えて分類の指標とした。それぞれの質問項目に対する回答は、4段階尺度で①では「すごく悩んだ・悩んだ」と「悩まなかった・全然悩まなかった」、②では「すごくあった・あった」と「全然なかった・なかった」とそれぞれ二分し、分類を行った(図1)。

大学入学・選択に悩み、将来の展望もないという、不本意な入学と考えられるAタイプ(16%)、大学選択・入学に悩むことはなかったが、将来の展望がなかったという、S体育大学の

将来の展望 <sup>#2)</sup> 大学選択 ・入学の悩み <sup>#1)</sup>	無(3・4)	有(1・2)
多(1・2)	Aタイプ	Cタイプ
少(3・4)	Bタイプ	Dタイプ

図1 タイプの分類

- 注1) 「大学入学・選択時に悩みましたか」  
 1: すごく悩んだ 2: 憩んだ 3: 憩まなかつた 4: 全然悩まなかつた  
 注2) 「将来の目的・希望はありましたか」  
 1: すごくあった 2: あった 3: なかつた 4: 全然なかつた

表4-1 クラブ参加状況(%)

		A	B	C	D
クラブには欠かさず出でていた	すごくそうだ	25.0	28.6	40.0	50.0
	そうだ	50.0	71.4	20.0	25.0
	そうではない	25.0	0.0	0.0	0.0
	全然そうではない	0.0	0.0	40.0	25.0
クラブは楽しかった	すごくそうだ	0.0	50.0	20.0	25.0
	そうだ	25.0	25.0	20.0	25.0
	そうではない	25.0	25.0	20.0	0.0
	全然そうではない	50.0	0.0	20.0	50.0
満足感・達成感があった	すごくそうだ	0.0	25.0	0.0	50.0
	そうだ	25.0	50.0	20.0	0.0
	そうではない	25.0	12.5	40.0	0.0
	全然そうではない	50.0	12.5	40.0	50.0
具体的な目標があった	すごくそうだ	0.0	62.5	20.0	25.0
	そうだ	50.0	12.5	0.0	0.0
	そうではない	25.0	12.5	40.0	75.0
	全然そうではない	25.0	12.5	40.0	0.0
自分はクラブに貢献していた	すごくそうだ	25.0	50.0	20.0	25.0
	そうだ	0.0	25.0	40.0	25.0
	そうではない	50.0	12.5	0.0	25.0
	全然そうではない	25.0	12.5	40.0	25.0

入学を何らかの事情で余儀なくされたことが予想される B タイプ (44%), 大学入学・選択に悩んだが、将来の展望のあったという C タイプ (24%), 大学入学・選択に迷わず (悩まず), 将来の展望のあったという、大学の一体感の強いことが伺える D タイプ (16%) の 4 つのタイプに分類された。

## 2) 各類型別退学者の在学中の特徴と変容

4 類型の退学者の在学中の特徴について次に分析することにしよう。彼らの中には、入学時の状況と様相を異にする変容タイプも見られた。以下タイプ別に記述する (表 4-1~5)。

A タイプ: 75% はクラブには欠かさず参加しているが、満足度・貢献度ともに低く、授業への取り組み方も消極的である。大半の者が「在

表 4-2 スポーツ観 (%)

		A	B	C	D
楽しければいい	すごくそうだ	0.0	25.0	16.7	25.0
	そうだ	0.0	50.0	16.7	0.0
	そうではない	100.0	25.0	50.0	50.0
	全然そうではない	0.0	0.0	16.7	25.0
勝たなくては意味がない	すごくそうだ	100.0	25.0	33.3	0.0
	そうだ	0.0	50.0	50.0	25.0
	そうではない	0.0	25.0	0.0	25.0
	全然そうではない	0.0	0.0	16.7	50.0
最大限自分の力を發揮したい	すごくそうだ	100.0	75.0	66.7	75.0
	そうだ	0.0	25.0	33.3	25.0
	そうではない	0.0	0.0	0.0	0.0
	全然そうではない	0.0	0.0	0.0	0.0
もっといい指導者がほしい	すごくそうだ	66.7	50.0	16.7	25.0
	そうだ	33.3	12.5	50.0	0.0
	そうではない	0.0	25.0	33.3	25.0
	全然そうではない	0.0	12.5	0.0	50.0
結果よりも過程が大切だ	すごくそうだ	0.0	37.5	0.0	75.0
	そうだ	66.7	37.5	83.3	25.0
	そうではない	33.3	12.5	16.7	0.0
	全然そうではない	0.0	12.5	0.0	0.0
一度始めた事は最後までやり通すべきだ	すごくそうだ	33.3	75.0	16.7	25.0
	そうだ	66.7	25.0	50.0	75.0
	そうではない	0.0	0.0	33.3	0.0
	全然そうではない	0.0	0.0	0.0	0.0

表4-3 授業 (%)

		A	B	C	D
授業は自分の目的に合っていた	すごくそうだ	0.0	0.0	0.0	0.0
	そうだ	33.3	37.5	0.0	0.0
	そうではない	66.7	37.5	33.3	50.0
	全然そうではない	0.0	25.0	66.7	50.0
特に興味を引かれた授業があった	すごくそうだ	0.0	50.0	0.0	0.0
	そうだ	33.3	0.0	16.7	25.0
	そうではない	66.7	25.0	0.0	50.0
	全然そうではない	0.0	25.0	83.3	25.0
信頼する教官がいた	すごくそうだ	33.3	50.0	0.0	25.0
	そうだ	0.0	12.5	0.0	0.0
	そうではない	0.0	12.5	0.0	0.0
	全然そうではない	0.0	12.5	50.0	0.0
出席率は良かった	すごくそうだ	33.3	25.0	0.0	25.0
	そうだ	0.0	37.5	16.7	50.0
	そうではない	66.7	12.5	0.0	0.0
	全然そうではない	0.0	25.0	83.3	25.0

「学中何かに打ち込むものがなかった」と答えており、うつろな学生生活を伺わせる。彼らのほとんどが友人関係について「本当に信用できる人はいなかった」と答えており、また、教員に対しても「信頼する教官がいた」という項目に「そうではない」と答えている者が66.7%いることから、友人間や、教員との間にサポートし合う関係が成立していなかったことが考えられる。入学した時点で抱いていた‘不本意な気持ち’を翻すことなく、ただ漫然と大学生活を続けていた様子が伺えるのである。

Bタイプ：大半がクラブに具体的な目標を持って参加しており、それなりの満足度・貢献度を示している。しかしながら、クラブ活動についてほとんどが「楽しければいい」というスポーツ観を持っており、他のタイプとは異なり、割り切った取り組み方をしていることがわか

る。また、授業やクラブ活動などに興味を寄せていたのもこのタイプが一番多く、打ち込んでいたという自覚があるようである。しかし、大学生活が充実していたというほどでもなかったようだ。以上のことから、彼らは彼らなりに大学生活に順応していたようであるが、入学を余儀なくされたという思いが、充実感を阻害していたのかもしれない。

Cタイプ：入学当初から考えると、クラブに欠かさず参加していた者とそうではなかった者に二分されており、目的を持って参加していた者が少なく、それに伴い満足度・貢献度も低下している。授業についても「自分の目的に合う」と感じ、取り組んでいた者が非常に少なく、信頼する教官も全員がいなかったと答えている。当然出席率は、4タイプ中1番低い。友人関係については満足しているが、「大学生になった自

表 4-4 大学生活全般 (%)

		A	B	C	D
クラブ・勉強・その他 打ち込むものがなかった	すごくそうだ	33.3	0.0	0.0	75.0
	そうだ	33.3	22.2	16.7	25.0
	そうではない	33.3	11.1	66.7	0.0
	全然そうではない	0.0	66.7	16.7	0.0
大学生となった自分 について特に意識した	すごくそうだ	33.3	11.1	0.0	50.0
	そうだ	33.3	11.1	0.0	50.0
	そうではない	0.0	22.2	50.0	25.0
	全然そうではない	33.3	11.1	33.3	25.0
大学生活は 充実していた	すごくそうだ	0.0	22.2	0.0	25.0
	そうだ	0.0	33.3	33.3	0.0
	そうではない	66.7	33.3	33.3	50.0
	全然そうではない	33.3	11.1	33.3	25.0

表 4-5 友人関係 (%)

		A	B	C	D
本当に信頼できる 人はいなかった	すごくそうだ	0.0	0.0	0.0	0.0
	そうだ	66.7	0.0	16.7	25.0
	そうではない	33.3	44.4	33.3	25.0
	全然そうではない	0.0	55.6	50.0	50.0
自分を頼ってくれる 人がいた	すごくそうだ	0.0	66.7	33.3	50.0
	そうだ	0.0	22.2	33.3	50.0
	そうではない	66.7	11.1	16.7	0.0
	全然そうではない	33.3	0.0	16.7	0.0
友人はよく自分を 助けてくれた	すごくそうだ	0.0	77.8	33.3	50.0
	そうだ	0.0	22.2	33.3	50.0
	そうではない	100.0	0.0	33.3	0.0
	全然そうではない	0.0	0.0	0.0	0.0

分」というものを自覚していた者も 4 タイプ中 1 番低く、学ぶ場としての大学に順応出来なかっただけでなく、高校から次のステップへ上がった事についての意識が弱かったと考えるこ

とができる。

D タイプ：他のタイプと同様、クラブには欠かさず参加していた者が多いため、目的が無くなり、満足度・貢献度などもそれに伴って低下し

表5 奥田・中込<sup>1)</sup>による職業決定過程の分類

I	確定型	職業決定を行っていく過程に最も深く関与している。決定に当たって自分の専攻や、先生や仲間の意見を考慮し、具体的な情報収集を行い、自身による最終決定がなされている。Marcia法による同一性地位では、同一性達成に近い。
II	思案型	これまで自分の就きたい職業について考えてはいるが、まだ納得のいくものではない。ある程度の見通しが伺われ、いずれ決定するものと思われる。Marcia法による地位分類におけるトラトリアムとの対応が大きい。
III ①	安直型	決定はなされているが、それに至るまでの過程において自我関与の程度が低い。「それほど考えないで何となく決めた（決まった）」といった決定の仕方である。やや選択への迷いが認められてもそれほど深く検討することがない。自己の決定に対する確信度はそれほど高くない。
III ②	平穏型	大学入学以前から将来の職業に関する大筋は決まっており、在学中、それまで抱いていた希望の再検討をすることがない。多くは先生や両親といった重要な他者の影響が強く、そのことが決定を導いている。決定の程度が高いが、それほど摸索経験を経たものではない。
IV ①	混合型	職業決定を行う過程に関与してはいるが、満足あるいは納得できる決定が得られず、途方に暮れている。興味・関心が拡散しており、摸索経験は表層的であるように感じられる。自己の適性や可能性について正面からの検討を行っていない。時に報告される希望職種は単に「憧れ」と受け止められ、最終決定ではなく本人もそれを自覚していることが多い。また、一応決定した職業であったが、採用不可能であることを知ったことにより、以前の決定に自信を失い混乱しているといった者も含まれる。この種の型に含まれる者の決定は深い摸索を通して得られたものでない事が多い。
IV ②	回避型	職業決定について考えようとしていない。こうした傾向は入学当初から伺われ、在学中も目立った関与がなされてきていない。自分自身がどうしたいのかと内省することなく、決定できないでいる。

ている。授業については、興味が薄かったにも関わらず、出席率は他のタイプと比べても良い方である。指導者に対して不満や期待を持っているわけでもなく、競技において究極の目標である勝利志向もほとんどの者が否定しており、このことはDタイプの特徴と言えそうである。このタイプは、①目的を持って大学に入学している、②まじめな性格、③競技への意欲喪失、という流れが特徴的であると言える。

### 3) 類型別退学時の特徴

ここでは退学の直接のきっかけとなった出来事、退学に対するイメージ、自由記述から読み取れる本音の部分について検討した。退学については、特に入学時の状況との関連が期待されよう。

「本音」の部分については、調査票の最後で「大学・教員・友人・その他にこれだけは言っておきたいこと」として、自由記述形式で調査を行った。判断は筆者らが行い、「大学や、関係者にうらみを抱いている」、「自分自身を責めて後悔し

ている」という事を示唆する記述のあるものをドロップアウト群、「あくまでも退学は自分の意志」「他への移行のための退学」を示唆する記述のあるものをトランスマーチー群とした。その際の無回答率は37%であった。有効回答数がさらに少なくなったため、ここではタイプ別に特徴的な記述を紹介する。

Aタイプ：彼らの退学のきっかけとして挙げているものにこれといった特徴はなかった。ドロップアウト群と考えられる者が多いものの、トランスマーチー群も少なからず存在している。無回答者はおらず、全員が積極的に意見を述べている。しかしながら、自由記述の中に、「大学は当時の私にとって、格好の居場所だった。自由と学歴とスポーツできる環境と大人になるまでの一時の中休み……」、「ここには、他大学にあるキャンパスライフがありませんでした。つまらないです。もう少しお金をかけてキャンパスを何とかして……」など稚拙でモラトリアムの典型的のような発言をしている者、また「怪我

をして目的を失ったが、家業を継ぐために頑張っている」など、他の対象への移行が上手くなされた様子が伺える記述をしている者もいた。

B タイプ：退学のきっかけが「他にやりたいことがあるような気がした」、「他に有意義なものにめぐり会った」等が多く、トランスマスター群は比較的多い。自由記述では数人が、「S 大学を心から愛していたが、ここにはない他の競技を目指すと決めた」、「教授は親切にして下さったが、国立大に合格したため……」、「もし自分に確固たる信念があるならば、それをやり抜くのが大切だと思います。……」など、大学生活からの興味の喪失・対象の移行による退学であったことが伺える記述をしている。ドロップアウト群には、「○○教授は信用できない！！」、「この大学では教員にはなれない。教員の汚さを知った」などがある。

C タイプ：「目的が無くなった」「やりたいことが他にあるような気がした」が突出した退学のきっかけとなっている。自由記述では、「大学卒の肩書きだけが欲しくて大学行くならやめた方がいい……」、「私自身が将来についてよく考えていなかった……」等、退学が自己の問題に起因していたことを示唆する記述も見られた。

D タイプ：一人、経済的理由の者を除いて、「クラブを辞めた」を退学のきっかけとし、「クラブ活動についてだいぶ改善されたらしいが、まだまだ確執が残っているように思えた。上級生の態度には憤りを感じた……」、「部活動では活動、規律が厳しすぎ、授業どころでなく、身体もぼろぼろにされた……」、「個性をつぶされた」等、回答しているもの全てがドロップアウト群であった。

以上、全体的に見ると、ABC タイプは、興味・目的の移行などによる「トランスマスター群」が多いのに対して、D タイプは「ドロップアウト群」つまり、うらみ、後悔など回答しており、全ての者がネガティブな感情を退学後も抱いている事が分かる。

#### IV. 考察

S 体育大学 25 名について、入学時及び在学中の状況を、中込・奥田<sup>19)</sup>が行った「職業決定過程の分類」(表 5) に従い、4 タイプの特徴と退学に至るプロセスを探っていくことにする。前述したように、スポーツ競技者にとって、過去のスポーツ場面での危機様態が、職業決定を中心とした青年期の発達課題への対処行動にも概ね繰り返されることが明らかになっている<sup>9)</sup>。すなわち、人生の転機等は、発達課題においての「危機」であるという考え方を援用して、「職業」部分を「大学入学」と置き換える、考えいくことにする。

A タイプは、入学時の状況が「職業決定過程の分類」III 型の安直型における決定の際の自我関与の低さと似ており、退学時までの流れから、体育大学に限らず存在するタイプであると言える。このタイプは、大学入学以前のいくつかの選択(危機)的な場面において人任せにしたり、選択する場に立ち会わなかつたりと、発達課題が未熟のまま入学していることが予想され、退学を阻止することは困難であると言わざるを得ない。B タイプは、入学を余儀なくされたという入学時の状況が「職業決定過程の分類」の IV 型の混乱型と類似している。しかしながら、在学中、退学時の状況を見ると II 型である思案型に変容している。これは全員ではないが入学時の余儀なくされた選択の際の危機的状況を転機とし、発達課題をクリアした可能性が考えられる。在学中はそれなりに順応してはいるものの、充実感に乏しいことから、不本意感と、在学中を有効な猶予期間として新たな目標設定をしたための退学であった者が多いうことが分かる。つまり、彼らにとっては結果的に、この大学に入学したことは一過程にすぎず、或いは発達課題の達成の転機であり、退学はその後再形成されたアイデンティティによって、自分のやりたいことを設定し直したためのものであったと解釈される。さらに II 型は Marcia 法<sup>7)</sup>による地位

分類の中で「モラトリアム」に対応するとされているが、B タイプの状況はまさに当時の大学生活をモラトリアム期間とし、進路変更等の決定により退学したと説明がつくのである。C タイプは、「職業決定過程の分類」の IV 型の混乱型に対応する。入学に対して消極的であったが、入学後新たに目標を設定し直していたようであった。しかし在学中の様子から見ると、自分が思うようにできなかつたのか、あるいは希望通りのことが大学に対して望めなくなつたのか、一転して展望を失い挫折していったようである。このことは、本人の言葉にもあるように目標設定の甘さが指摘され、決定の仕方が IV 型の「深い模索を通して得られたものでない」ことに相当し、このタイプも体育大学特有の退学者とは言えず、発達段階をクリアしていないための退学であるという事ができる。最後に D タイプについてであるが、入学時の様子は「職業決定過程の分類」の中の最も好ましいと思われる I 型の確定型に似ている。彼らは「体育大学に入り、自らの目標を全うしたい」という願いを持って入学した。しかし、在学中に大きな変貌を遂げている。この流れは、安直な決定の III 型と考えられる要素を含んでいるが、退学時の状況から「何らかの原因により目的であったクラブから離脱を余儀なくされ、それによって大学における存在意義を失ってしまった」事が読みとれ、これまで述べてきた ABC タイプの、職業決定過程に見られる、入学当時の同一性の問題とは一線を画すものである。つまり、I 型という Marcia 法による職業決定ステータス尺度において、「同一性達成」に近いと思われる彼らが、クラブ離脱という危機(中込ら)<sup>9)</sup>に遭遇し、その危機を克服できないまま退学した、ということである。このことは、入学時の同一性のみでなく、大学入学後に焦点を当てなくてはならない。このタイプの在学中のスポーツ観は、一般的の大学生競技者とは異なり、勝利志向を不自然なほど否定しており、指導者に対しての要求度も目立つて低下している。ところが、クラブは

「楽しければいい」とは考えてはおらず、やり始めたことも最後までやり通すべきだと答えている。このことから彼らの性格は非常に「まじめ」であり、そのため目的を失いながらも漫然とクラブに参加し続け、意義を取り戻せないままに離脱していったことが伺えるのである。また、離脱時の苦しみも一通りではないことが予想され、「へされた」などの記述からも分かるように、うらみなどの攻撃対象が自分以外に向いていることにもうなづける。退部時、後のサポートに対する不満も原因の一つではないだろうか。岸、中込<sup>28)</sup>によるバーンアウトの発生機序の病前性格、発病状況の記述に当てはまりそうな者もこのタイプの中に存在している。このようなタイプは体育大学特有であると言え、その後の状況からも体育大学において問題の残るパターンを提示している。

## V. まとめ

この研究は、調査票ゆえの限界と回収数の少なさから傾向を探るのみであった。しかしながら回収された調査票ひとつひとつが持つ意味は大きく、その中から体育大学特有の退学者像も垣間見られたような気がする。今後事例研究などにより、より深い理解を得るための縦断的な研究が必要であると言える。

(本研究の要旨を第 5 回宮城体育学会で発表した。)

## 引用・参考文献

- 1) 奥田愛子・中込四郎「スポーツマン的アイデンティティの志向性と職業決定行動との関係」、体育学研究 37-4: 393-404, 1993.
- 2) 岸 順治・中込四郎「運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み」体育学研究, 34-3: 235-243, 1989.
- 3) 下山晴彦「ある高校の進路決定過程の縦断的研究」教育心理学研究 32-3: 206-211, 1984.
- 4) 下山晴彦「大学生の職業決定の研究」教育心理学

- 研究, 34: 20-30, 1986.
- 5) 下山晴彦「高校生の人格発達と進路決定—テストバッテリーについての縦断的事例研究」東京大学教育学部紀用, 22: 211-222, 1982.
  - 6) 大学入試センター管理部進学情報課 選ぶ前に知る：平成4年度大学ガイダンスセミナー報告書, 大学入試センター, 1993.
  - 7) 鎌幹三郎ら 自我同一性研究の展望：青年期シンポジウム 3, ナカニシヤ, 1984.
  - 8) 中込四郎・岸 順治「運動選手のバーンアウト発生機序に関する事例研究」体育学研究, 35-4: 313-323, 1991.
  - 9) 中込四郎 危機と人格形成：スポーツ競技者の同一性形成, 道和書院, 1993.
  - 10) 山野 保「うらみ」の心理：その洞察と解消のために, 創元社, 1989.

(平成8年10月30日受付, 平成8年12月19日受理)